

## 「正気になる」

2014年06月29日

29日（日）の主日に読むように勧められている御言葉はマルコによる福音書5章1節～20節までである。主イエスはゲラサ人の地方に着き、舟から上がられると、汚れた霊に取りつかれた人が墓場からやって来た。彼は墓場を住まいとし、足枷や鎖で縛っても引きちぎり砕いてしまう。昼も夜も叫び、石で自分の体を打ちたたき、血だらけである。主イエスを見ると、走り寄ってひれ伏し「いと高き神の子イエスよ、かまわないでくれ、後生だから、苦しめないでくれ」と懇願する。主イエスが「汚れた霊、この人から出て行け」と言われたからである。主イエスが「名は何と言うのか」と問うと、彼は「名はレギオン、大勢だから」と答える。汚れた霊どもは追い出さないでくれと言ひ、この地で飼われていた「豚の中に送り込み、乗り移らせてくれ」と願う。お赦しになると、霊どもは豚の中に入った。すると、2千匹ほどの豚の大群が暴走し崖を下って湖になだれ込み、次々とおぼれ死んだ。豚飼いたちは逃げ出し、町や村に知らせた。何が起こったのかと来てみると、レギオンの霊に取りつかれた人は服を着、正気になって座っているのを見て恐れた。

おどろおどろしい奇跡である。汚れた霊が人に取りつき狂気にするという考えが基本にある。聖書は言葉数が少なく、理解し難い。それは逆に、想像力を高める。この奇跡はレギオンの霊が「鍵」であろう。レギオンは6～8千人からなるローマの重武装軍団で、レギオンが突っ走る所は死体が累々と重なる戦場となる。レギオンの霊に取りつかれた人は全身全霊が「重武装軍団」になった。自分自身を傷つけ、鎖に繋ぎ止められず、他者に恐怖と害を与える。レギオンの霊が乗り移った豚の大群は歯止めがきかず、湖の中へと溺死していく、自らの死へと暴走する。

富国強兵に走った日本軍は暴走し、アジアを戦場と化し、屍を重ねていった。その最後は無謀な「玉砕」、「神風特攻隊」、片道の燃料しか積まない「戦艦大和」など、死へと暴走するしか術をもたない軍隊になっていった。レギオンの霊を彷彿とさせる。

マルコ福音書の著者は、自分自身と他者を傷つけ、死へと暴走するレギオンの霊から解放された人が「正気になる」と書いている。

この奇跡には続きがある。ゲラサは異教の地で、イスラエル人が汚れた動物とした豚を飼っていた。豚は経済効率のよい家畜である。肉はもちろん食料となり、足も「豚足」して食べられ、毛はブラシになり、捨てる場所がない。ゲラサの住民は、墓場を住みかとし、鎖を引きちぎり、叫び続ける人に「困ったものだ」と困惑していた。その彼が正気に戻ったことは喜ぶべきことである。しかし、その代償に2千匹の豚が失われたことは耐えられない。彼らは一人の人間の救いより、豚がもたらす経済を優先させ、主イエスに出て行ってもらいたと要求した。

レギオンの霊に取りつかれた人は、自分自身と人々を死へと追い込む「軍隊」と人より経済を優先する「資本」の狭間で「正気になる」主イエスの奇跡に与っている。「軍隊」と「資本」が人間を貶めている現代に呼びかける極めて現代的なメッセージが込められているのではないかと、想像は膨らむ。主イエスの福音は人を殺す軍隊より、また豊かさをもたらす経済より、一人の人間を救う愛に向かっている。